

# 博士論文審査及び最終試験の結果

本論文は、題目を「内モンゴル東部地区特有の口承文芸の研究—ホールチとホーリン・ウリゲル、ホルポー、ウリゲルト・ドー」として、従来その伝記のみが記録され、存在意義すら言及されていなかったホールチ（ホール…四胡という楽器を弾く者の意）という民間芸人を多面的に取り上げ、彼らとその成立発展、演奏など全ての面で深く関わったホーリン・ウリゲル、ホルポー、ウリゲルト・ドーについて論究したものである。

また、上記3種類の口承文芸にしても「殆ど全ての先行研究に於いて個別的研究に終始し、相互の関連についての言及も皆無であった」とし、その点を批判しつつ、ホールチがこれら3種類の口承文芸といかに関わりながら発展させてきたか、それから3種類の口承文芸が相互にどのような関係にあったか等について論究した。本論文の特徴は以上の点にある。

次に、本論文の概要は以下の通りである。

序論において、包金剛氏はこれら3種の口承文芸に関する先行研究及び自身の研究目的について概観を示した。

この際、氏は3種の口承文芸各々の収集と研究について現在利用し得る殆ど全ての資料と研究論文とを利用している。

次に、研究目的について、「本論では、これら3種の口承文芸相互の関連と、各口承文芸とホールチとの関わりに注目し、その上で、各々のジャンルの生成発展、それらの歴史的背景、社会的背景等について述べる。更に、これらの作業を通じて従来軽視または殆ど無視されてきたホールチの有する意義を積極的に論究してみたい」と述べた。

更に、この序章に於いて、これらの3種の口承文芸を享受しているモンゴル地域に居住するモンゴル人の数は約230万人に達し、これは全モンゴル人の48%を占める—即ち、多くの口承文芸の中で、これらの3種ほど広く享受されているものはない—とも述べた、

続く第1章では、ホールチについて取り上げ、その出現のプロセスと社会的地位の変遷、彼らの活躍の場について述べた。

第2章では、第1章で述べたホールチとホーリン・ウリゲルを関連付けて論じている。

ここではホーリン・ウリゲルの概念について述べている。

氏は、「ホーリン・ウリゲルに関する先行研究は約20編の論文があるが、ホーリン・ウリゲルの概念についての論文は皆無である」と言い、更に「この研究をするためには、その概念を規定しなければ不可能である」と述べる。

そして、『「ホーリン・ウリゲル」とは、漢民族の歴史長編小説がモンゴル語に訳され、それを「ベンセン・ウリゲル」（つまりノートに書かれた物語）と言うが、それを基にして上記ホールチ達が語った作品を言うのである』と述べている。

因みに、漢民族の歴史長編小説とは、三国志演義、西遊記、水滸伝、封神演義などに始まり、漢民族の現代小説である林海雪原、黄継光、白毛女に至る多くの作品が含まれる。

更に、モンゴル人自身の作品である青史演義、一層楼、泣紅亭、ガーダー・ミーリン、広大な故郷などもベンセン・ウリゲルとして登場する。

しかし、ホーリン・ウリゲルではベンセン・ウリゲルの中から戦争物、英雄豪傑の活躍する作

品のみが語られるという特徴を持つ。

また、ホーリン・ウリゲルでは韻文形式、散文形式を交互に用い、ホール（琴）という四弦の胡弓のみの伴奏で語るなどについて広く深く論じている。

第3章では、ホルポーについても概念規定をし、その起源が上述のホーリン・ウリゲルにあり、もちろんホールチという民間芸人の寄与の大きさにも触れている。また、本章ではホルポーの分類と文化的背景についても触れ、当時のホルポーは全て即興による作品であったと論じた。

第4章では、ウリゲルト・ドーについて論じ、このジャンルも上述のホーリン・ウリゲルの基礎の上に発生したものであるとした。

本章で包金剛氏は、ウリゲルト・ドーの概念をも規定した。

このように、それぞれのジャンルの概念を規定することによって、従来これらの口承文芸の発生時期、発生場所などについての「思い込み」による発言や言及などに批判を加え、自身の論究に基づき、これらをほぼ固定し得たことは氏のこの分野における大きな功績と言えよう。

第5章では、上記3種の口承文芸の基礎の上に東部地区（即ち、当該の口承文芸が盛んに語られ歌われている地区）に、他の地区とは異なった文学一因みに、書面ホルポー、散文文学（映画の脚本なども含む）、長編詩等が出現し、発展を続けていることについて論じた。

このことは、殆ど学校教育も受けず文字も知らず、ひたすら口承によってのみ作品を生み出し、それを自ら語り、歌ってきたホールチ達の芸術が教育を受けた識学階級の人々にも受容され、文字を与えられるということであった。

しかし、皮肉にも、このことがホールチと3種の口承文芸の衰退へとつながっていくことになる。

包金剛氏はこのことにかんがみ、「ホールチの活躍の場を広げ、彼らの社会的地位を高めるべきである」と述べ、更にホールチ達は技能を高めるべきであり、聴衆のニーズに合わせた作品を語るべきだ」と述べた。これは、日本における能、狂言、歌舞伎、漢民族における京劇、越劇などが国や多くの個人、団体の支援によって民族芸能、芸術として重視されていることとの対比において言及されたものであろう。

以上、概観してきた論述に基づき、包金剛氏はおおよそ次のような結論を導き出した。

1. ホーリン・ウリゲルは18世紀末頃、ジョソト盟のトゥメット旗で発生し、主に内モンゴルの東部地区に伝播し伝えられてきた。なぜこの地方のみで発生したか言えば、

- ① この地区には伝統的語り物が多くあった。
- ② 早く漢化し、漢語の受容能力を得た。
- ③ 定住するようになったために一時に多くの聴衆に語り得た

ということになる。

2. ホールチという民間芸人の出現に伴い、ホルポーという口承文芸が生成発展した。

3. 時代的（17～18～19世紀）にも民族的、階級的抑圧、売買婚制度、戦争、仏教による迫害などがホルポーとともに発生してきたウリゲルト・ドーの格好のテーマになった。

4. これら3種類の口承文芸の成立、発展、隆盛などに与って力があつたのがホールチである。ホールチとはホール（四弦の胡弓）を弾く者の意であるが、それのみにとどまらず、その楽器の伴奏で物語を語り、ホルポーを即興的に作って語り、ウリゲルト・ドーを作詞作曲してこれを歌うといったマルチタレント的な民間芸人であり、彼らの存在なくして上記3種の口承文芸は

存在し得なかったであろう。

したがって、ホールチという民間芸人はモンゴル口承文芸史の上だけでなく、モンゴル文学、芸術全般においてももっと高く評価されてしかるべきである。

## 評価

口頭による最終試験において審査員諸氏からは、全体的に見て論旨は明解であり、しかもよくまとまっているとの評価がなされた。

一方、日本語の用法がやや冗長であり、繰り返しが多いとの指摘もあった。しかし、これらは外国人のことであり、技術的な問題であるので論旨に瑕瑾となるものではない。

包金剛氏はホーリン・ウリゲル、ホルボー、ウリゲルト・ドーという3種類の口承文芸相互の関係、そして、ホーリン・ウリゲルが漢民族の歴史長編小説類のモンゴル語訳を導入することによって成立し発展を遂げた。その際、それらの成立発展にとってホールチの存在は不可欠であったとし、彼らと3種類の口承文芸とをしっかりと関連付けて論述した。

このことはこれら3種の口承文芸に関する先行研究の中で誰も論究しなかったことでもあり、氏の功績である。

また、これら3種類の口承文芸は上述のごとくその発生の時点から漢民族の文化の影響を受けたものであるために、モンゴル民族の中でも比較的漢文化の影響の少なかった現代のモンゴル国の学者たちにとっては扱いにくいものである。このことについては本学客員教授フレルバータル氏が「包金剛氏の本研究は、全モンゴル民族の文学、文芸研究の中で内モンゴルの学者にして初めてなし得るところであり、我々全モンゴル族のこの分野の研究にとって非常に大きな成果であり、刺激ともなる」というコメントが雄弁に物語っている。

その他にも審査員諸氏よりの包金剛氏への多くの質問、意見、アドバイスがなされ、かなり活発な審査会となった。

審査員一同より包金剛氏のこのテーマに関するより深い、より広範な研究を望むとの激励の言葉がかけられた。